

救護活動を通して地域貢献目指す

オホーツク管内・遠軽町 救護ボランティアメディカルサポートチーム

最高気温 18 度という、ランナーにとって好条件の爽やかな秋空の下、2500 人がコースを駆け抜ける「北見ハーフマラソン」が2015年10月11日に行われた。そこで無線機を片手に「〇〇地点に行つて」と的確に指示を出していたのが「救護ボランティアメディカルサポートチーム」の代表、中川貴仁さん（35）だ。

同サポートチームは、オホーツク管内で開催されるマラソンなど地域のイベント会場に救護所などを設置、運営して救急医療活動や啓蒙活動を行っている。

中川さんはオホーツク管内津別町出身。専門学校で救急救命士の資格をとり、2003年（平成15年）に遠軽地区広域組合消防本部に入り、現在は消防士長の階級で主に救急隊長を務めている。2013年（平成25年）に旭川医科大学大学院の修士課程に入り、昨年4月からは弘前大学大学院地域社会研究科の博士課程に進学している。

中川さんが同チームを設立したのは、2008年（平成20年）4月1日。もともと人のため、地域のために役に立ちたいという思いが強く、中学、高校と生徒会活動を行っていたという。剣道やテニスなどスポーツにも関心が高かった。

消防士になってからもその志は変わらなかった。

「地域に貢献するのは公務員として当然でその活動として、地域に提供できる最適な方法が救護活動だと思っていました。消防士は呼ばれないと現場にかけつけませんが、待っているより現場に出向いたからこそ助けられることはある。万一の危険と隣り合わせの確率が高いマラソンなどの競技のときには我々消防が出ていくべき」と地域貢献や救護活動の必要性を感じていたと中川さん。



救護活動にAEDや自転車は欠かせない

たまたまテレビで観ていた2007年（平成19年）の「第1回東京マラソン」で受けた衝撃が、中川さんを会の立ち上げへと突き動かした。

当時、自分と同世代の大学生がもう既にこの取り組みを始め、多くのランナーを救っているのを観て、「学生たちがこれだけがんばっているのに、現職が何もしないのはおかしいのではないか」（中川さん）。

東京マラソンを契機にこの活動を始め

ることを消防士の後輩に伝えると皆が賛同し、チームを立ち上げることに。

■ 立ち上げ当初は失敗の連続

地元で行われている大会の救護体制を調べると、体制は整っていないどころか、主催者からは「救護をしたければご自由にやっても構いませんよ」という素っ気ない回答ばかり。

なかなか、理解されず、そのもどかしい思いを主催者にぶつけたこともあったという。

それにもめげず、主催者に再三電話をかけ、当初は6月と10月のマラソン大会のみで活動していたが、3年ほどたつと主催者にも活動が評価されるようになって、活動をアピールしてきたことで知名度が上がったりするようになって、「今年もお願いします」など依頼が徐々に増えていった。

もっとも活動当初は、救護の重要性が理解されず、必要な物品にも予算がつかなかったため、中川さんの夏のボーナス30万円ほどを全てその支払いにあてたこともあるという。また物品を用意する準備だけでも夜7時で終わる予定が、12時までかかり3時間後には会場に集合、結局寝る間もなく救護活動にあたったこともある。そのほか、メンバー全員に昼食を食べさせる時間が確保できなかつたり、人員を大会のスケジュールどおりにうまく配置できなかつたりとうまくいかないことだらけだったと振り返る。

ちなみにマラソンの救護活動には、AED1台、無線機1台、包帯などの外傷セット、ベストなど一式必要で、そのほか、自

転車や人員を搬送する車両、血圧計、酸素ボンベなどもかかせない。AEDのレンタルは1台1万円から1万2000円ほど。救護体制の規模の大きなイベントでは、無線機で30万円、レンタカーは25万円ほどで、総額100万円からそれ以上がかかる。今では、どこの大会でもその費用は支給されているが当時はそれを工面するのが大変だったという。

そうした数多くの失敗から学んだことや、東京マラソン、スポーツ医学の論文から独学で学んだりして今ではスケジュール通りに進行できるようになった。また、名前の由来となった函館のメディカルサポートチームからもノウハウを学んだことも大きい。



無線機で的確に指示を出す中川貞仁さん

■ 「メンバーの熱意によって成り立っている」

メンバーは30人で全員が遠軽地区広域消防本部の消防職員だ。消防本部には125人の職員がいるからその中の4分の1がメンバーということになる。20・30代の若い世代が多い。中川さん以外に事務局長、会計、顧問がいるが、多くの仕事は中川さんが担っている。

大会によっては、医師や看護師などと連携して救護活動にあたることもある。

イベントに参加するメンバーは、イベントごとに所内のメールで知らせて応募してきたメンバーたちだ。

イベントによって集合時間や解散時間は変わるが、朝8時に集合して夜9時解散、朝3時集合で夜7時に解散など体力的にもハードなことが多い。

「メンバーは睡眠時間がない中で駆けつけてくれ、奥さんや子供がいる中で貴重な連休を犠牲に活動してくれています。若いメンバーたちの体力と熱意で成り立っている活動だと思っています」と中川さん。

■ 「重症の手前で止めるのが

我々の役割」

主に活動している大会は、「サロマ湖100 kmウルトラマラソン」、「北見ハーフマラソン」で昨年からは始まった「オホーツク網走マラソン」は中川さんがオブザーバーとして招かれた。そのほか、「まるせっぴ観光まつり」、「安国^{やすくに}野外音楽祭」など地元遠軽町のイベントでも活動している。ビアパーティーや青少年のバレーボール大会など数百人以上が集まるイベントには主催者と相談のうえ出向き、救護所とAEDを設置することにしている。

救護では、擦り傷、切り傷、火傷など子供の外傷が最も多く、お祭りの場合は、飲酒・泥酔によって気分が悪くなったり、暑い中でのマラソンでは熱中症になったり、ときには交通事故もある。

大会やイベントによって救護される人

数は変わるが、ウルトラマラソンや観光祭りなど参加人数が多いとその人数に比例して救護を受ける人も多くなり、1日、50、60人にのぼるケースもある。

今まで関わった大会では、一般の市販薬で対応可能な軽症の場合が多く、幸いなことに死者やAEDを使用するような重篤な患者は出なかった。

「僕らがすぐに応急処置を実施したことで、事なきを得て入院しなくてすんだということもあります。軽症でも軽く考えずに救護所に足を運ぶことが大事で、我慢して後で重症になると本人が一番困ります。気軽に来てくださいといつも広報しています。結果論なのでわかりませんが、軽症で止める防波堤の役割を果たしているのかなと思います」と中川さんは語る。

■ 次の目標は啓蒙普及活動と

冬のイベントでの活動

心がけているのは、メンバーを道路の真ん中に配置したりして、あえて参加者に目立つ位置に立ってもらうこと。そうすることで参加者に安心感が出るし、体調が悪くなったときにすぐ申告しやすくなるからだ。また、スタート直後とゴール手前では、AEDを必要とするような重症者が発生する確率が高いことから、より手厚く救護要員を配置している。

中川さんは、大きなマラソン大会の時には、参加者名簿を確認するだけではなくスタートのときには必ずランナーを一巡してランナーの特徴を一通り確認するようにしている。「中高年の参加者が多い」、「若い屈強な人が走っている」などのイメージ

を持っておくと万一の場合に素早く対応できるという。

3年間助成金をもらっておらず、毎年の余剰金を貯めていっているわけでもないため、助成金で購入にした高額な心電図を測るモニターなど、資機材が壊れたときの費用をどう工面するかが目下の悩みだ。また、活動を続けていくためにはかかせないメンバーのサポートについても十分とは言えないという。



安国野外音楽祭の救護所。女性救急救命士も活躍している

「全てボランティアですが、メンバーが大会で使用した自転車やバイクのガソリン代の代わりにタイヤを支給したり、『ご飯代に使って下さい』との謝礼はチームの懇親会で使ったりしています。やはり楽しみがないと続きませんから、打ち上げだけはできるだけするようにしています」と中川さん。

今後は、地元以外の大会で人員が足りなければ、メンバーを派遣して現地の消防士との連携なども考えていきたいという。

啓蒙普及活動にも力を入れ、イベントのときにAEDを展示した心肺蘇生法のコーナーを設けている。展示するだけでなくAEDが実演できる体験コーナーをつく

ることが次の目標だ。

また、今は夏のイベントのみへの参加だが、冬の競技やイベントでもニーズがあるか調査し、必要であればクロスカントリーやスケート大会、雪祭りや氷祭りなどの会場でも救護活動を広げていくという。

「冬は屋外イベントに限らず体育館での競技も盛ん。人が集まる機会は、沢山あるので活動の場はいくらでもあります。イベント主催者はどうしても大会を盛り上げて無事に終えたいと運営面ばかりに目を向けがちですが、一番大切なことは怪我や事故を起こさないこと。主催者の方には救護救急の重要性に気づいてもらえるよう活動を続けていきたい」

「自分からやりたいと思ったら、後は一直線ですから」と自身の性格を語る中川さん。そこに熱意あふれる隊員たちが集まる。命に直結する救護活動はかけがえのない地域貢献と言えそうだ。

■ 連絡先

〒099-0404
遠軽町大通北4丁目2-24

救護ボランティアメディカル
サポートチーム

代表 中川 貴仁（なかがわ たかひと）

TEL 080-1878-2970
Email : mcsyatyo@yahoo.co.jp